

水産研だより

- 1 「清流の国ぎふ・水みちの連続性連携検討会」の開催
- 2 「ニホンウナギの生息環境に関する実験」
- 3 「親子溪流釣り教室」が開催されました



干潮時の干潟を移動するイシガイ

1 「清流の国ぎふ・水みちの連続性連携検討会」の開催

新緑の季節になると、河川から農業排水路へ遡上するフナやナマズを見かける方も多いかと思えます。水田や農業排水路を中心とした水田地帯は、多くの魚類の繁殖・成長の場としても重要な環境です。水田地帯が魚類の繁殖・成長の場としてきちんと機能するためには、河川、農業排水路、水田を魚類が自由に移動できる環境づくりが必要です。

このため、河川課、農村振興課、農地整備課といった異なる役割をもつ行政機関が互いに連携し、面的な広がりを持った水田地帯の連続性を確保する取組みがはじまりました。名称は、「清流の国ぎふ・水みちの連続性連携検討会」といいます。

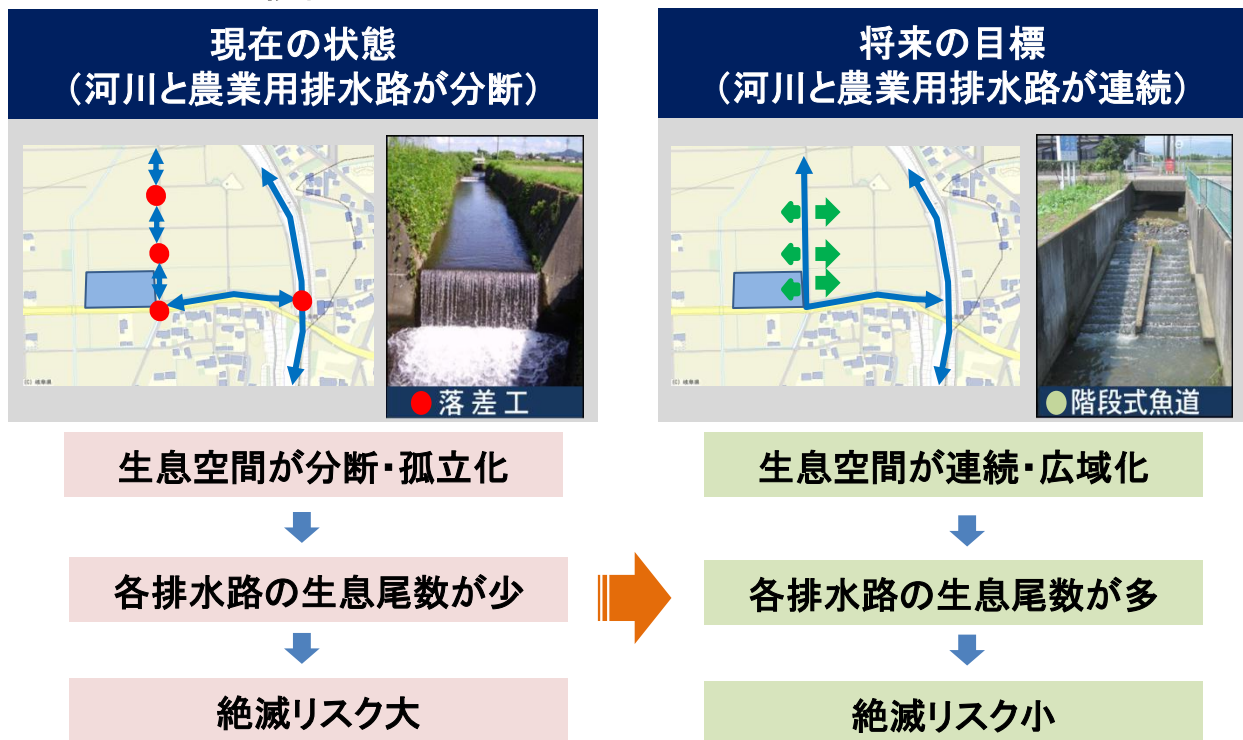
この検討会を中心にして、魚類の自由な移動の妨げとなる落差工をなくしたり、農業排水路と水田をつなぐ水田魚道を整備するなどして、面的な広がりを持った水田地帯の連続性を確保する取組みを実施していきます。当研究所は、できるだけ効果的な取組みが実施できるよう、高い効果が期待できる水田地帯を選定したり、整備後における魚類の回復効果を検証したりと研究面からサポートしていきます。



第1回 検討会議の様子(岐阜県庁にて)

(生態環境部 米倉)

■ 水みちの連続性の再生イメージ

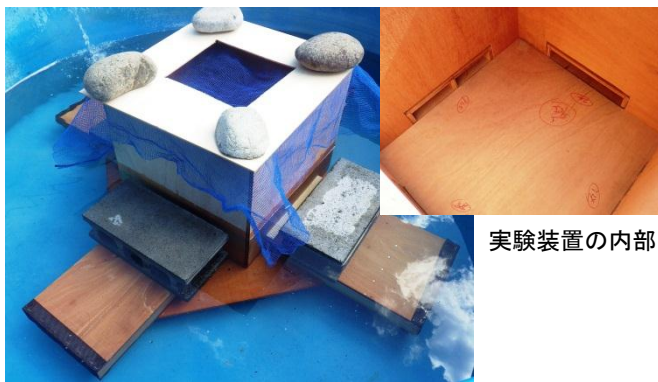


2 ニホンウナギの生息環境に関する実験

岐阜県のニホンウナギの漁獲量は、昭和58年の147tをピークに減少傾向にあり、平成25年には県全体で約22tにまで減少しています。この原因の一つとして河川におけるニホンウナギの生息環境の悪化が指摘されています。

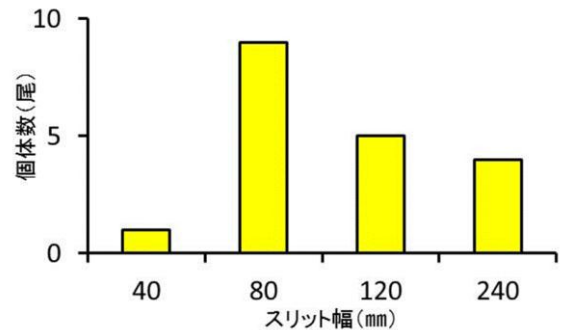
河川環境をニホンウナギの生息に適した環境に改善するには、ニホンウナギの好む生息環境の特徴について知る必要があります。そこで、河川におけるニホンウナギの生息状況調査を行い、河岸の植生や底質、水深、流速等のデータを収集する一方で、水槽内に装置を設置してニホンウナギの好む穴の大きさについて実験を行いました。下記の画像のとおり、間隙の大きさを高さ4cmに固定し、幅24cm、12cm、8cm、4cmの4種類の穴を付けた装置にニホンウナギ(平均約40cm)を投入した結果、8cmの穴を選択する個体が最も多い結果となりました。口径の小さな穴が選択される傾向がありながらも、最も小さな4cm幅の穴が選択されにくかった理由としては、穴の出口(装置外側)にネットが張ってあるために通り返けができず、穴の中での回頭がしにくかったためであると考えられます。今年度も、ニホンウナギの住みやすい環境についてさらに調査を進めていきます。

(資源増殖部 武藤)



実験装置の外観

実験装置の内部



3 「親子溪流釣り教室」が開催されました

下呂市金山町で「親子溪流釣り教室」が5月10日に開催されました。

この企画は、金山町内の小学生とその保護者を対象とし、馬瀬川下流漁業協同組合の主催により行われました。当日は晴天に恵まれ、計84名の参加がありました。当研究所の職員は、飛騨地方に分布する魚類についてスライドや配布資料を使って解説しました。

(下呂支所 藤井)



水産研究所職員による講義の様子



河川での釣り教室の様子